

<インタビュー>昭和と平成の2度にわたる架け替えの実状を聞く ‘先人が築いた名橋を護る誇りと責任’

元 岩国建築協同組合理事長 村中 巧氏((株)村中工務店 社長)

—最初に、自己紹介を兼ねまして、これまでのご経歴などをお伺いします。

村中 私の姉の婿が大工で、フィリピンに召集されて戦死してしまい、大工道具が家に置かれていました。終戦直後で職がない時代でしたが、私が大工道具をいじり出したのを見て、父親が「近くの腕のいい棟梁の弟子に入れ」と勧めるので大工見習いになったのが15歳の時です。弟子に入ったものの厳しいばかりで何も教えてもらえないから、3年後山口市の職業訓練所に入りました。もう3年もやっているから、すぐにリーダー格で働くこととなり1年程日赤の戸建て宿舎を建て、その後も各地を大工仕事で回っていました。昭和23年に起



村中 巧氏 (むらなか・たくみ)

昭和5年生まれ、20年大工弟子入門。26年二級建築士取得。27年錦帯橋再建に大工として従事。29年に(株)村中工務店を創業し、代表取締役就任。39年一級建築士取得。平成13～16年には岩国建築協同組合理事長・総括責任者として、錦帯橋平成の架け替えに取り組む。現在、(社)山口県建設業協会・建築委員長、岩国商工会議所・役員、岩国市麻里布地区連合自治会・副会長。

きた福井地震の際には、震災地に一番に駆けつけ、潰れかけた建物の修繕にあたり、その後、地元の岩国に戻ってきました。

22歳の時に、錦帯橋再建の仕事があるというので、地元建築界の大先輩である竹中さんの紹介で戻りました。昭和25年9月の「キジア台風」で錦帯橋が流失して、架け替え工事の人手が足りなかったのでしょうか。始めは3人の若い同僚と一緒に、親戚宅の6畳間で自炊しながらの臨時雇いという形でした。組合員は給料が出ていましたが、臨時は小遣い応援でした。昭和の再建の棟梁は篠原さんという方で、「弁当代あるか、食うのは大丈夫か」と臨時雇いの私たちに随分気を遣ってくれました。大工道具もそれまでの手持ちの道具だけでは無理なので大きな道具に作り替えて、仕事は一人前にあれこれやらせて貰って、いま考えれば当時の色々な苦勞が全部身に付いていて感謝しています。

当時も大工組合がありまして、最初は西と東に別れて、片倉組と篠原組でそれぞれ15人ぐらいで競争してやっていたのですが、その後事情があって篠原組に統括されました。携わった人数はその時々で違っていますが、平均20人で作業し、正味1年で5橋全部造り終えました。

—昭和の架け替えを大工として経験されているんですね。村中さんは平成の架け替えにも関わることになりますが、当時の思い出など伺えますか。

村中 平成の架け替えの事前勉強で市役所に呼ばれたとき、文化庁が記録した昭和の



▶ 昭和の架け替え時の村中青年



▶ 昭和の架け替え時の大工たち。後列右から3人目が村中氏

架け替えのフィルムが見つかったというので見てみますと、私がアップで4～5か所出てきてもう感激しましてね。当時の話で盛り上がりました。また、第4橋の工事の時でしたが、台風が台湾を北上中ということで突貫工事にかかっていた中、足場を解くときに他の大工さんが切ってはならない番線を切ってしまい、そこにいた私は足場と一緒に落ちて流されてしまったことがありました。一時気絶して水を飲んで病院に運ばれたんですが、夕方にはまた戻って仕事をしたことなんかはよく思い出されます。一平成の架け替えに至る経緯はどのような流れだったのでしょうか。

村中 長年の雨の影響で木自身が保たなくなっているうえ、橋脚の石垣がタールを流したように黒くなっていました。錦帯橋の河原は駐車場も兼ねているため観光バスや車からのスモッグの影響があるようで、大学教授も研究されていました。

大工の技術については、平成7年頃から岩国伝統建築協同組合の方々の中で架け替えに向けての事前研修が始まっていました。私が理事長を務める岩国建築協同組合も市に呼ばれて、地元施工の伝統を守るためには、特定建設業で総元請となれる我々の組合しかないというお話でした。また、

大工さん方にはもう先行して勉強をさせているが、元請側の予算は結果的に7億円しかないということも言われました。これは相当にシビアな提示で、希望者は組合員のうち12社しか残らなくなったのですが、理事長としてはもうやむを得ず、私は責任者としてボランティアでやるから、皆ついてきてくれと頼んで、始まったのです。とにかく、市民総参加の大事業です。実行予算を組むのに2～3か月は夜も寝られず気が休まる日はありませんでしたね。

一昔からの図面は残っていたのですか。

村中 現存する最古の図面は江戸時代の架け替えの時のものになりますが、昭和の架け替えの時に、側面からすべて原寸を引いて型板を作ったものが岩国徴古館に残っていたそうです。3分の1程はもう腐食していて、完全な保管ができていなかったのは悔やまれますが、残った分を最大限生かし、あとは計算で補い原寸で再現することができました。それはフィルムに撮って、保存をしています。

施工図面や大工工事は、岩国伝統建築協同組合の大工の中村雅一さんがコンピューターを勉強していたことが大きく貢献したと思います。機械力も昭和の時より相当進歩してしまっていて、プレーナー1つで、一遍

かけると全部矩折が正角にできたり、便利なものでした。

—施工は村中理事長の岩国建築協同組合が元請となり、大工工事は岩国伝統建築協同組合が下請になったのですね。他の職種や木材の調達について伺います。

村中 木工事は、地元の伝統建築組合が中心となり20数人の大工で進め、その他の業種も地元の各業種組合を通じて金物・塗装・石工・板金・シーリング・解体・クレーン・仮設・電気などの下請がありました。例えば、橋板の段々は全部鋼板敷です。木材の防腐注入は、今回は塗らずに私の提案で全部どぶ漬けにしました。踊り場の石も張り替えています。材木は市当局の方からの支給品で、3年がかりで12業者を分担して頼みました。さらに、倉庫の保管の管理費、3度にわたって運搬した管理運搬などがすべて予算の中に入っていました。そんな状況下で、延べ約2万6,000人が、関係者を始め多くの方々のご協力により誰もかすり傷1つせずは無事故で工事を終えられたのは誇りに思います。

—20年に1度行われる伊勢神宮の遷宮では、20代、40代、60代と3つのグループで20年ごとに回して伝承しているのですが、錦帯橋ではどうでしょうか。

村中 それが本当の姿でしょう。錦帯橋では、昭和と平成の架け替えの間の50年の空白が、その円滑な伝承体制を組めなくしてしまったのです。ちなみに、平成と昭和と2度にわたってまともに大工として活躍できる職人はいなかったということです。私はどちらかという職人肌でしょう。本当は自分が道具を使ってやりたかったのですが、今回は理事長という責任者なので、大工ではやれない。それがいまでも心残りです。今後の市の構想では20年サイクルで行

うらしいのですが、そうしないと将来たちゆかないと考えたようです。

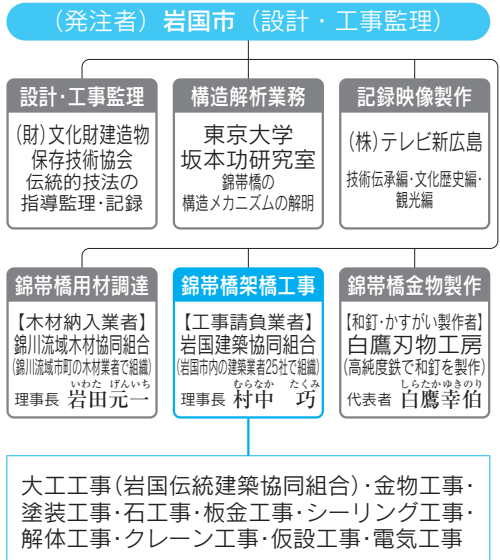
—今回も架け替えができたのですから、これからもできていくのではないですか。

村中 そういう問題ではないのです。現行基準法での元請のグループを集めることそのものができないです。岩国建築協同組合自体がもう解散していますから、これからの大きな課題です。今後の錦帯橋の架け替えをどのようにしていくかに真剣に取り組んでいかないと大変なことになると思います。

—今後、20年で架け替えるにしても、今回の経験を生かして架け替え方法など工夫していく必要がありますね。

村中 昔とは違い機械力がものすごく進んでいますから、道具もちょっと替えることで対応できますし、欄干は宮大工さんの範疇という感じはしますが、構造体の木組みは、大工の理屈がわかった人、大工の心得がある人であれば、いけるでしょう。1橋目こそ色々苦しましますが、2橋、3橋にな

▶事業組織図



※下請負については地元各業種組合を通じて発注する。